

戦時下の土浦中学生 1

～第一海軍航空廠・学徒たちの戦い1～ (霞ヶ浦その23)

第一海軍航空廠(一空廠)に通年動員となった学徒は、土浦中学 44・45・46・47・48・49 回生の外、麻生中学(現麻生高校)・土浦高等女学校(現土浦二高)・土浦女子商の生徒たちでした。今回から、『戦後五十年 卒業五十周年 第一海軍航空廠動員学徒の集い記念誌『戦いのなかの青春』(茨城県立土浦中学校(中45回)・土浦高等女学校 動員学徒の集い実行委員会)(1995・平成7年8月15日刊)、『櫻水物語 戦中派の中学時代(中48回・高1回 屋口正一)(1987・昭和62年5月27日刊)』をもとに、学徒たちの戦いを綴っていきます。
文中の【 】内は筆者による注記です。



工員からタガネ作業の指導を受ける都立第三商業生
『アサヒグラフ』1944・昭和19年5月3日号より

土浦中学45回生

動員学徒の集い実行委員会委員長であり、『戦いのなかの青春』編集委員会委員長でもあった渡邊光夫(中45回)は、土浦中学入学から一空廠入廠までの学校生活を次のように綴っています。

「昭和16年4月桜花爛漫の真鍋台の土浦中学校に紅顔の美少年相集う。その数212名。そしてこの年12月8日には大東亜戦争が勃発し我々は聖戦完遂の名のもとに、農繁期には出征兵士の家の農作業の手伝いに駆り出されていた。そして18年4月には岩瀬繁君が仙台、桜井元君が名古屋の陸軍幼年学校へ入学したが、まだ国内は戦勝ムードにあった。然し、この年の厳寒には全員が出島村【現かすみがうら市】の農家に分宿し、昼は米増産のための土地改良作業に従事するなど勉学もままならぬ状態であったが、日本の勝利を信じて頑張っていた。19年に入ると戦いも厳しさが加わり憂国の念やみがたくなり、軍隊への入隊希望者が続出した。その先陣を切ったのが4月1日陸軍特別幹部候補生として入隊した越川弘君、海軍甲種飛行予科練習生第14期前期生として入隊した篠山文夫、鈴木重男、中山福男の諸君であった。そして6月2日には小生の君原小学校時代からの親友戸張禮記君【本紙第76号に掲載している】が第14期後期生として入隊したのであった。」

かくして7月には既に閣議決定されていた『学徒戦時体制確立要綱』に基づき土浦中学・土浦高女・麻生中学の4年在学生全員が阿見町にあった第一海軍航空廠に動員されたのである。(後略)『進修同窓会東京支部会報『東進』第13号・1999(平成11)年4月1日発行]

入廠

1944(昭和19)年7月11日(火)10時から、土浦中学4年生(中45回)と土浦高等女学校4年生との入廠式が、学校長・学年主任の臨席のもとに挙行され、第4代廠長和住篤太郎中将の式辞の後、学徒代表の長南武夫が宣誓を行いました。

12日(水)からは、養成班において、「軍機保護法」・「服務綱領」・「工員規則」・「計測器具」・「航空機一般」・「作業に用いる器具類」・「発動機」などの講義(座学)と基礎作業の実習とが行われました。女学生と一緒に部屋で講義を受けることもありましたが、これは、男女共学ではなかった土中生にとっては、まさに青天の霹靂、嬉しいような、恥ずかしいような、こそばゆい気持ちで、技術士官の話などは上の空であった生徒も居たようです。実習は、「タガネ」・「ヤスリ」・「キサゲ」から始まりました。

「タガネ(鑿)」は、鉄板を切断する作業で、それぞれの万力に一人ずつ付き、厚さ5mm程の鉄片を銜えさせ、ハンマーを大きく振り下ろして力一杯鑿を叩きます。力を入れないと鑿の刃先は鉄片に食い込まず切れません。頭を打ち損なうと鑿を握った指を打ったり掠ったりして、皮が剥け血が噴き出します。指導員が吹くピーツという笛に合わせて、ハンマーを振り上げてはガチャンと打ちます。この繰り返しで、鑿は少しずつ鉄片に切り込んでいきます。

「ヤスリ(鑿掛け)」は、簡単なようではなかなかに力と技の要る仕事でした。長時間の反復練習で、血豆ができる程絞られました。

「キサゲ」は、彫刻刀の兄貴のようなもので、金属面を削り、100分の1mmまで擦り合わせるといふものです。削った面に朱肉のような塗料を塗って、紙に写すと

高い所だけが染まりますから、そこを更に削ります。様に平らになれば高低無しに全体に色が着く筈ですが、とても難しく、何度も反復練習をさせられました。養成班での基礎訓練は10日程続き、24日(月)からは教育班に移りました。適性検査によって、旋盤などの機械工作組と銅工・仕上げなどの手作業組とに分けられ、28日(金)午前中に教育班での実習が終了し、29日(土)から現場配属となり、それぞれが各工場で作業に当たることになりました。当初は、危険作業や熟練作業からは除かれていましたが、次第に一般工員と同様になりました、かつ一人前の戦力となっていました。



指導員の笛に合わせてハンマーを振り下ろす都立第三商業生(上)『アサヒグラフ』1944・昭和19年5月3日号より。右下の工具がキサゲ。

入寮

土浦中学45回生は入廠に先立ち、7月8日(土)、全員が烏山の工員養成所寮に入りました。寮の一室の大きさは8畳程で、部屋の両側に作り付けの2段ベッドがあり、片側4人宛で8人部屋になっていました。45回生たちが決められた部屋に入って、ズボンをたくしあげ、荷物の整理をしていると、蚤の大軍に襲われました。ふと気が付くと、足が真っ赤

になつています。よく見ると、小さな赤いものが這い上がつてきています。早速、用意されていた白い石灰の粉を多量に撒きましたが、撃退できず、撲滅手段は唯掃き出すだけ。寝具の毛布にまで入り込み、痒くて極度の睡眠不足に悩まされました。しかし、入寮して朝に夕に掃除を続けると、不思議な話ですが、数日で蚤は姿を消していました。

7月29日(土)には、麻生中学4年生約100名が、麻生港から水郷汽船のあやめ丸で土浦港に到着、航空廠のトラックで11時に入廠。身体検査・作業服の貸与後、班毎に宿舎に入り、土中生の各室に2名ずつ配属されてきました。

寮には角帽や丸帽の海軍依託学生(注)が数名居て、中隊長・小隊長として生徒たちの生活指導に当たっていました。上級学校への受験勉強に取り組む者もあり、技術将校や海軍依託学生が密かに指導してくれたこともありました【土浦中学の教師陣は夜の授業も考えたが、生徒が疲れ切っていたので実施を見送った】。

寮での生活は、起床から就寝まで、海軍生活そのものでした。朝5時、「総員起こし」で起床、寝具・蚊帳の整理、着替え・洗面の後、宿舎前に整列。隊列を組んで、グラウンドの朝礼場に駆け足で集合。朝礼は、軍艦旗掲揚から始まり、訓示の後、本日の指示・伝達事項となり、最後に海軍体操。体操が終わると、食事当番は駆け足で食堂に向かい、他の者は隊毎に駆け足で宿舎に戻り、部屋の掃除【特に廊下は、甲板かばん掃除と称して、腰を落として磨かされた】。掃除が済むと点呼で、室毎に廊下に整列し、甲板将校がやって来て点検。点呼後、また舎前に整列して、駆け足で食堂へ。食堂では当番が烹炊所から食器と食缶とを受け取り、配膳を済ませています。椀にはジャガイモの入ったご飯が漬物を添えて盛っており、それに味噌汁の入った汁椀とお菜さ

いの入った小鉢とが付いていました。全員が食卓に着くと、1分間の黙祷の後、「食事に掛かれ！」の号令で一斉に箸を付けますが、1〜2分であちこちから「馳走さま！」の声が掛かります。食事が済むと一旦宿舎に帰り、6時30分過ぎ、「庁舎前整列！」の号令で再び舎前に整列、駆け足で航空廠へ。タイムカードを押して7時5分前には入廠。各職場に到着すると全員整列し朝礼、宮城きゅうじよう遙拝、一空廠体操、「配置に就け、仕事に掛かれ！」で作業開始。11時30分昼食。弁当部で作られた弁当が寮生の昼食として各職場へ配られます。木製の弁当箱で中身はジャガイモやサツマイモの入ったご飯。おかずも貧弱なもので、忽ち食べ終わってしまい、当時、生徒たちはこれを「ゴジ弁(乞食弁当)」と呼んでいました。12時作業再開。3時30分終礼。4時10分カードを押して帰寮、入浴。5時30分夕食。夕食後は自習時間ですが、灯火管制が敷かれていたため、暗幕代わりの毛布で遮光した部屋で、思い思いに勉強しました。8時45分巡検

【陸軍では「消灯ラッパ」が一日の終わりで、海軍では「巡検」と言った】。「巡検5分前！」の号令が掛かると、各員は、蚊帳を下ろしたベッドの中で目を瞑って、不動の姿勢で巡検を待ちます。巡検のラッパが鳴り、「巡検！」の号令で巡検士官がコツコツと靴を鳴らして、懐中電灯で各ベッドの中を照らして点検を行います。中には一日の疲れで軒を掻いて寝込んでしまふ者も居ましたが、咎められることはありません。巡検後、起きて勉強をしても良かったのですが、昼間の疲れでみんな直ぐに寝入ってしまいました。

休日(土)には教練査閱があり、午前は各工場、4・5年生の作業状況の査閱が査閱に代えて行われ、午後は学校で3年生以下の査閱が通常通り実施されました。なお、この査閱が土中では最後のものとなりました。

11月18日(土)には教練査閱があり、午前は各工場、4・5年生の作業状況の査閱が査閱に代えて行われ、午後は学校で3年生以下の査閱が通常通り実施されました。なお、この査閱が土中では最後のものとなりました。

退寮

寮生活をしてきた生徒たちの食事は次のようなものでした。

- 9月4日(月) 朝) 麦飯、茄子醬汁、茄子漬
- (昼) 馬麦飯【馬鈴薯と麦を主体としたご飯】、塩引【塩漬けの鮭】、キウリ【胡瓜】漬
- (夜) 馬麦飯、茄子醬汁、キウリ漬
- 10月2日(月) 朝) 麦飯、茄子汁、キウリ漬
- (昼) 馬麦飯、公魚ワカサギ、茄子漬
- (夜) 馬麦飯、うどん汁、キウリ漬
- 11月4日(土) 朝) 諸麦飯【薩摩芋と麦を主体としたご飯】、ネギ汁、菜
- (昼) 諸麦飯、大根、菜の煮付
- (夜) 諸麦飯、ウドン汁、菜漬

これは、麻生中学生に付き添っていた教師が書き残した1944年9月4日から翌年1月2日までの航空廠での献立の記録からの抜粋です【当時の逼迫した食糧事情を伝える貴重な資料である】。

食べ盛りの中学生にとっては、常に空腹を抱えての毎日となりました。更に食事は段々と悪くなつていって、入寮当初はご飯の中にジャガイモが入っていたのが、日増しに芋の量が増えていき、とうとうジャガイモの周りに「ご飯粒が付いているような状態になり、昼の弁当はダイコン飯になつてしまいました。そのため、夜になると、塀を乗り越えて隣の

畑のサツマイモを盗んで来て、生の蕎麦を嚙る生徒も出てきました。空腹に耐え抜くこと、これは航空廠の生活で全ての生徒が経験した苦しみでした。

こうした状況の中にあつて、子どもたちの健康状態を心配していた父兄の有志が相談をして、学校長を通じて航空廠に通勤の許可を願ひ出しました。その結果、自宅からの通勤が認められ、生徒たちの寮生活は中止となりました。土中生は9月16日(土)に退寮し、18日(月)から自宅からの通勤が始まりました【土浦高女生は9月30日(土)に退寮、10月1日(日)から通勤を開始した】。しかし、麻生中学生をはじめとする、自宅が遠方で通勤が不可能な生徒たちは、1945年8月20日(月)の退寮式まで寮生活を続けました。

お国のためとは言いながら、育ち盛りの15〜16歳の少年少女が学業を擲ち、このような粗食に耐え、休日も殆ど無い苛酷な労働に従事したことを思うと、戦争の非情とともに平和の有り難さを感じみと感じます。

(注)海軍依託学生
海軍では、兵科・機関科・主計科については、それぞれ兵学校、機関学校・主計学校で士官を養成していたが、その他の分野では依託学生制度を設け、大学から人材を募っていた。依託学生には海軍から月額10円の学費と年間35円の被服費とが、学校を通じて支給された。卒業後は造兵(兵器担当)・造機(機関担当)・造船(艦船担当)などの各技術士官又は軍医の各中尉相当官に任官した。

※参考文献
「勤労動員学徒の日記抄」中45回 風間 雍
「学徒動員の回想」中45回 篠田 康
「勤労動員学徒の日記抄」
土浦高等女学校4年4組上野(佐々木)美代子
「工員寮の悲喜(こも)」中45回 狩谷孝雄
(『戦いのなかの青春』所収・4編とも)
『櫻水物語 戦中派の中学時代』
中48回・高1回 屋口正一